Stragglers Party

榊屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｓｔｒａｇｇｌｅｒｓ　Ｐａｒｔｙ

【Ｎコード】
Ｎ０２１０Ｘ

【作者名】
榊屋

【あらすじ】
この物語に『主人公』はいない。この物語に『仲間』はいない。この物語の『結末』は知らない。この物語を『描く』ものだけがそれぞれ存在している。『自分』が様々な謎にそれぞれの形で立ち向かう。これはそんな物語だ。　※ネタバレの危険性があるため、序章が終わるまであらすじは意味の分からない感じになっています。申し訳ございませんが、しばらくお待ちください。

1話　表面上の奇跡

僕はいつも通り学校へ向かう。3月22日。高校受験も3日前に結果発表され、本当の意味で終わり、卒業式も明日と迫っていた。学校は僕の家から自転車で約5分。

学校についた。

本日は卒業式のリハーサル（リハーサルって何だよ。僕らの卒業は1回だけだぞ！なのに先生達はどうして俺達にリハーサルなんてことをやらせるんだ。大体、僕らはそ【省略】）えーっと、何の話だったけ・・・・・・？

ああ、そう。

リハーサルのため、荷物はそんなに多くない。僕は荷物を机の上に置いて、ポケットの紙を確認した。

「よし・・・・・・」

「何が『よし』なんだ？」

と、そこで友達が来た。僕は焦ってポケットに紙を入れる。

僕の幼馴染で、気さくな態度で誰とも仲良く出来るという才能を持つ、高校生活に不安なんてなさそうな、校則をしっかり守った髪形の、運動神経トップクラスで成績はトップ、名門高校を受験した生徒会長である、針葉陽一様だ。

「長い」

と、僕は理不尽に呟いた。全く。もっと平凡な人間であれよ！と、責任転嫁している僕を見て、針葉は不思議そうな顔をして、

「何か忙しそうだな」

と笑った。

「そういや」

と、眼鏡の位置を戻して（優等生＝眼鏡という偏見は離れないのか。悲しきかな）、針葉は言った。

「襲（かさね）、高校受験しなかったんだって？」

襲というのは僕の名前だ。女みたいで、あまり気に入っていない。
「まぁな」
「どうしてだ？働かないといけない状況にでもなっちまったのか？姉さんと2人暮らしだし・・・・・・」
「姉さんって・・・・・」
「ああ、悪いな。昔からの癖だ・・・・・・。で？どうなんだ？」
「別にそういうんじゃないんだけど・・・・・・」
僕は1度撤回してから、言うべきか否かを考える。
・・・・・うーん。
「実は、高校に行くんだけど、この辺の地域じゃないんだ」
「ってことは、推薦で行くのか？」
「どうだろう。授業料免除、全寮制で教科書とかも無料らしい。金は全く掛からないから両親は了承しているし、姉さんも『さっさと行け』ってさ」
僕は笑ってそう言った。
「あの人らしいな」
針葉も笑う。
「まぁ、これはどっちかというと招待って感じだな」
「そうだよな。お前は部活には入っていないし、勉強も言うほど出来ないしな」
・・・・・・はっきり言ってくれる。
ま、否定できないわけなんですが。
「そうだ、針葉」
「何？」
「最近、世間で話題になっている暴力事件知っているだろ？」
「・・・・・・あぁ」
暴力事件。
正確に言うならば、暴力致死事件。
「あれって何件目だっけ？」
「あ～・・・・・・確かね」

針葉は思い出すように額に指を当てた。
「昨日、１７人目が死んだって今朝のニュースで言ってたよ」
・・・・・・へぇ。
「あれって、無差別殺傷事件の延長なんだろ？」
針葉がそう言った。
無差別殺傷事件。
数ヶ月前からこの街にのたまっている、謎の殺人鬼。
最初の事件は、老婦だった。１人の老婦が家の前でナイフで刺されていたそうだ。
その事件がニュースで取り上げられたのは１回のみ。その後は、一度もその事件は取り上げられなかった。
その後、会社員、主婦、ヤクザ、学生、ホームレスなど様々な人間が殺されたが、それぞれの事件は１度ずつしかニュースとして取り上げられては居ない。
しばらくして、その事件に噂が流れた。
『その人々を殺したのは、殺人鬼ではなく警察の上位の人で、事件を取り上げる事は出来ない』
という内容だった。
それは、なるほど納得できる理由ではある。
しかし
「途中から殴殺に転向したのは不思議だよな」
僕はそう言って、針葉に同意した。
「どうしてだと思う？」
僕は針葉に訊いた。
「分からないな・・・・・・殺人鬼の気持ちは僕には」
「そうか？天才なら分かるんじゃないか？」
「別に天才じゃないよ」
苦笑いで・・・・・・しかし強い口調で針葉は言った。
「そうか。何か悪かったな」
「いやいや」

そう言って針葉は笑って、事件の話を打ち切った。
まぁ、彼も暇つぶしにはなっただろう。
どうせ明日には皆忘れる話だろうし。
チャイムが鳴ったので、教室に入って先生の話を聞い（ている振りをし）て、体育館で卒業式のリハーサルを終わらせた後、針葉を家に誘った。
「いや、今日は止めておくよ。姉さんによろしく伝えてくれ」
「お前の姉さんじゃないだろ」
「そうだね。えっと・・・・・・」
「美雪だ」
「そう。姉さんによろしく」
「直ってない！！」
と、ぐだぐだな会話をしてから帰途に立った。自転車だけれど。
走る。
思い切り漕いだ。
なんとなく、ストレスを発散するように。
気分はスカッとする。

そう、いつもの夜のように。

2話　裏表リミテッド

家に着く。
「ただいま」
返事は無い。
僕はリビング横の座敷に入り、祖父母の仏壇に手を合わせる。
「・・・・・・」
僕はやはり、父さんの息子なのだろう。ねぇ、じいちゃん、ばあちゃん。
誰も何も答えない。
僕はそのまましばらく座って手を合わせていたが、部屋の古い時計がボーンという音を立てて響く。
時計は3時を指していた。リビングのソファーに転がって、テレビを点けた。
「・・・・・・ニュースはまだやってないか」
昔見たドラマの再放送をしていた。
だとすれば休憩しますかね。

「ただいま」
という声で目が覚めた。
ああ、寝てしまっていたのか、ということに気が付いた。
「もしかして寝てた？テレビの電気がもったいないよ」
姉が声を掛けつつ、そして冷蔵庫の前へ。
「寝てない」
「あんた、昨日の夜遅くも出かけてたでしょ？」
聞いてないな。ていうか知ってたのか。
「殺人鬼だか暴力男だか分かんないのが、うろついてんだから気をつけるように」

そう言って1?サイズのペットボトルのお茶を飲み始めた。
「姉さん・・・・・・」
「何？」
「・・・・・・本当に高校行っていいの？」
「いーよ。無償でしょ？他んとこよりマシ」
「寂しくない？」
「はぁ？」
姉は間抜けな声で応対した。
「父さんと母さんは海外で活動中・・・・・・祖父母も他界・・・・・・姉さん1人になるでしょ？」
「アホか。私はもう18だ。もうすぐ成人だっつーの」
「でも彼氏もいな「殺すぞ」
「はい、すいませんでした。包丁を下ろしましょう」
姉の殺すときの殺意は、冗談じゃないくらい僕の心をえぐってくる。父と母の影響だろうか。
危険な女だ。
何とかしないと。

「あんたは心配しなくていい」
姉はそれだけ言うと2階に上がっていった。
・・・・・・。
時計を見る。
6時だった。つまり3時間余り寝ていたということか。
ショックー。
で、テレビ（点けっぱなし）を見る。

『本日、15時頃、1人の男性の殴殺死体が発見されました』
15時・・・・・・僕が寝始めた頃か。
『昨夜の未明頃、殺害されたと思われ、以前からの無差別殺傷事件と同一犯で、これで被害者は17人目と警察は発表しています・・・

・・・』
その後、キャスターやコメンテーターが事件について話し始めた。
どうも人気のないところで殺されたらしく、偶然通りかかった高校生3人のグループが見つけて通報したそうだ。普段は通らない帰り道で、もし通らなかったら気付かなかっただろう、ということらしい。
「さてと」
僕は呟いてから立ち上がり、2階に上がって仮眠を取る事にした。テレビを切るのも忘れずに。
階段を上がって自分の部屋の前に、そしてドアノブに手を掛けた。
「襲」
と、隣から声が上がった。
見ると姉が自分の部屋から顔だけを出してこちらを見ている。
「夕飯は？」
寝ようとしていることがばれているようだ。
「起きたら食べるから適当に作っといて」
「コンビニ弁当でいいか？」
「作っとけ！」
俺は姉を叱咤してから、自分の部屋に入った。
部屋はがらんとしていた。
荷物はほとんどまとめられ、寝るのはロフトなのでベッドもなく、あるのはもう使うことも無い学習机と椅子だけだった。
「・・・・・・・」
僕はポケットから紙を取り出して、机の上に置いてからロフトを上がる。そして布団に横になってから携帯電話を開く。
「・・・・・・・」
トップニュースでは、『現代のねずみ小僧』という見出しが『オークション　全て贋作』というものがあった。もちろん、僕らの地域の『連続殺傷事件　１７人目』というのもあった。世の中、犯罪に満ちているなぁ。

思いながら連続殺傷事件の記事を見る。
「今まではナイフで１４人だったが、１９日以降、殺殺に転校した・・・・・・か」
呟くように読み上げる。
まぁつまり殺殺死体は３人ということか。
ということは事件は殺殺死体は３日前から１つずつ作られているわけだ。別に無差別殺傷事件をそこまで取り上げる必要はなかったんじゃないだろうか。だって、どうせ数年後には何の問題もなかったように表舞台から消えるのだから。
さて、眠りに入ろう。

ピピピピ・・・・・・。
と、アラーム設定しておいた携帯電話が、音ともに震え始めた。
時間は１２時。
・・・・・・よし。
隣の部屋・・・・・・姉の部屋の扉をノックする。
返事は無い。開ける。
居ない。
１階へ降りる。誰も居ないし、飯も無い。
計画通り、結局はコンビニに行ったのだろう。僕と一緒で今まで寝ていたであろうことは容易に想像できる。
「・・・・・・やっぱりなぁ」
僕は自分の部屋に戻って着替える。黒いパーカーとジーンズに身を包む。
「・・・・・・姉さんは楽にしてあげないとな」
僕は自分の学習机の中からナイフを取り出した。
父の名前が柄に刻まれているナイフだ。元々はふたが存在してい

なかったそうで、父が蛇の皮のようなもので作ったナイフカバーに入れてある。取り出して刃を見る。研いであり、錆なんて１つも見当たらない。

準備完了、計画を遂行しよう。

「っと・・・・・・」

部屋を出ようと足を向けてから、机の上に置いておいた紙をポケットに入れた。それから今度こそ部屋を出た。

家を出て、コンビニの方向を見る。

月が無い空で星の光を感じる。

「・・・・・・行ってきます」

今行くよ。

楽にしてあげるからね。

姉さん。

3話　月無き夜、星に願いを

月の無い夜。
その田舎町で、人も車も見られない中で僕を含めた2つの影が走り続ける。
「・・・・・・・」
僕は静かに前方の影を追いかける。対して、
「ハァ・・・ハァ・・・」
向こうは苦しそうに逃げ続ける。
僕は強くナイフを握り締める。そして息切れしないような全力で追いかける。そのくらいの呼吸法は知っている。僕は頭はいいのだ。体力もある。
「・・・・・・」
しかし、向こうもなかなかにしぶとい。女にしては体力がある。僕と同じ運動方法を取っていないのだから、凄まじい体力だ。
コンビニからの帰りだったろう。そのときに声を掛けた僕を見て――見ただけで、逃げ去っていった。まだナイフも出していなかったのに、だ。相手を殺人鬼だと気付いて逃げ出した神経のすばらしさ。末恐ろしい女だ。
いつ考えても凄い姉さんだ。
殺したいほど。
「ハァ・・・・・・ハァ・・・・・・」
苦しそうに走っていく。
大丈夫、もうすぐ楽にしてあげるから・・・・・・！
僕はフードを深くかぶりなおした。
気付くと田舎町では、まだ都会部に値する地域に到着した。
人は居ない。そりゃあそうだ。僕のような殺人鬼が存在する街で夜中に外に出ようなどと考える者が居るはずも無い。のに、僕は連続で人を殺すことができている。

だって物好きな奴が居るんだから。だから僕は止まれないのさ。
路地裏に入ったその「物好きな奴」を見て、スパートを掛ける。
そしてそこで追いつくことに成功した。
つーかまーえた。
「く・・・・・・・・！」
「・・・・・・・」
僕はその顔を殴った。女は飛ぶように奥へ吹き飛ぶ。
「・・・・・・」
僕は自分の拳を見直す。
当った感触の割りに、向こうにダメージはほとんど無いようだ。
やはり凄い女だ。
ナイフを持ってきておいて良かったようだ。
僕はまだ倒れ伏している対象に向かってナイフを突き立て――。
「！？」
腹部に強烈な痛みと衝撃が走った。
そのまま数メートル僕が転がって配水管のポールに背中をぶつけて止まった。
「……」
そこには男がフードをかぶって立っていた。
男は黙って口に何かをスプレーする。恐らく……。
「サッサト逃ゲロ！」
変声期のような音を出して、女を見る。
女ハ男の姿を見て、頷いて逃げ出した。
「……」
「悪イナ。アレヲ殺サセルワケニハイカナインダヨ」
「……」
「アレハ僕トハ違ッテ表立ッテ強イワケジャない」
声が戻ってきたのだろうか、男はもう一度口にそのスプレーを入れる。
「……ヨシ。デ、アレハソノキニナレバ何デモ殺スト思ウケド……。

僕ハソレヲヨシトハシナイ」
聞くのも無駄だ。
僕はそう判断して走り込んだ。そしてナイフを胸部に突き立てようと腕を伸ばす。
「諦メロ」
君はそう言って、そのままナイフを右手の人差し指と中指の間で掴みとった。
「！」
コイツはヤバイ。おかしい。
普通の運動神経や握力、そしてこんな状況に即応してナイフを掴むなんて……普通は出来ない。こいつは普通じゃない！
と思った瞬間。空いていた左手が僕の腹部を殴ってきた。そしてそのままナイフを抜き去り、右手で頭を押さえつけられて、地面に仰向けに倒された。
後頭部に強い激痛が走った。
「オ前ニナイフヲ使ウヨウニ仕向ケタ。オ前ハ気付イテイナイダロウナ。デ、オ前ハ使い方を知らない。ナイフを使ったとしても――ナイフを使ったからこそ、僕にお前が勝てる事は無くなったということだ」
声が戻った。
そして気付いた。
コイツ……！！
「お前の動機は理解しているつもりだぜ？殴殺死体が出来上がり始めたのは、合格発表の当日……つまり、3日前だ。その日以来、1つずつ死体が出来上がっている。……ここまで言えば、誰にでも分かると思うぜ？なぁ」
そう言って僕を見下ろして、フードを外した。
そして僕の名前を呼ぶ。
「針葉」

「……襲(かさね)ェ！」
どういうことだ！うしてコイツが……！！
ともかく現状回復だ。
僕は馬乗りになっている襲を蹴り飛ばした。そして距離をとった。
「……」
何から喋ればいいのか、と思っていると。
「まず」
と、向こうから話を始めた。
「動機は『受験失敗』だ。受験に落ちた腹いせに、他の成功した奴らを殺すことでストレス発散しようとしたんだろ？警察は無差別殺傷事件の続きだと思ってるらしいけど、そうじゃないことは俺がよく知ってる」
襲は笑う。
そして僕を指差した。
「犯人はお前だ」
まるで探偵のような振る舞いだ。
「探偵……？僕はそっちじゃないよ。どちらかといえばお前側だ」
僕側……？
「ともかく」
襲はそう言って話を区切った。
「お前は難関高校を受けて落ちた。いつも天才って言われ続けたプレッシャーとそれによるストレスが爆発した。それでその夜、1人目の男を殺した」
「……」
「何で怪しいと思ったか……それは主に勘だ。お前が犯人じゃないかと思って、お前の発言の一つ一つを注意して耳を傾けていたのさ。そして今日・・・・・・いや、もう昨日になっているな。昨日の学校での話に矛盾を発見した」
襲はニヤリと笑った。

何だ。
僕は何を失敗した。
「３つ目の死体が発見されたのは今日の昼だ。なのにお前は朝から知っていた。つまりお前は１７人目が死んだのを何故か知っていた。朝は鵜呑みにしていたが、昼になってようやく全てが繋がったんだ」
「……僕は死体を見ただけだ」
「じゃあ何で通報しなかったんだ？どうして夕方まで人が現れないような道を使って登校して来たんだ？何で、ニュースを見たって嘘をついたんだ？」
叩き込むように僕に向かって言い放つ。
何か。
何か言い訳僕は天才だその程度の事瞬時に思いつかないでどうするだから僕は落ちたんだ落ちた？落ちた僕が落ちた違う皆が何かしたんだ僕は何も悪くはない僕は何かしたわけじゃない何もしなかったわけじゃない頑張った頑張ったんだだけど――「あああああああああああああああああああああ！！」
僕はそのまま襲に突っ掛かった。
しかし襲はそんなものを諸共しないように受け流した。そのまま今度は額を地面にぶつける。
僕は必死に襲の方に向き直った。
すると、先ほど同様に襲は僕を見下ろしていた。
「全てが指すのは『お前＝犯人』という等式だけだ」
襲は僕を指差した。
「お前に学校でこの話をしてプレッシャーをかけて、姉さんを囮に使ってみた」
「姉さんを囮に……」
囮にしていたのか……しかし、事情を知っていた風な感じではなかった。
「昔からの付き合いだからな。姉さんもいつもと違う雰囲気をお前から感じていた。殺気を感じ取ったんだよ。姉さんは、そういうの

に敏感だから」
だからこそ、何の説明もせずに囮に利用したんだけれど。
襲はそう続けて、僕を睨んで「あと」とさらに続けた。
「姉さんはお前の姉さんじゃない」
「悪いな。家族ぐるみの付き合いだったから、無意識だ」
僕はそう言って静かに立ち上がった。
「初めて会話が成立したぜ」
「もう諦めたんだよ。警察でも何でも呼べ」
襲をそう言って突き放つ。現状にのっとれば、本来の意味で突き放されているのは僕だが。
しかしここまでバレているのなら、もはや無意味だろうという判断の発言だった。
のだが。
「はぁ？」
襲の発言は僕の望むべきものではなかった。
「お前は捕まえない。姉さんを守るためには、殺人鬼のいる町として治安を守るべきなんだよ」
「……？」
確かに、今こうして殺人鬼がいる街並は、その殺人鬼を除けばとても平和だ。
だが。
それはつまり、僕を逃がすという事か？
「つーわけだ」
そう言って襲は僕から奪ったナイフを僕の前に投げた。
なるほど。どうやらそういうことらしい――。
「！！」
僕は落ちていたナイフを取ると同時に後ろに下がった。
襲の手の中で何かが光ったのを見たからだ。
「ばれたか」
そう言って堂々と襲はナイフを光らせた。

「お、お前……」
「お前には死んでもらうぜ」
何言ってんだコイツ……。しかし、襲の目は本気で、ナイフをしっかり握っているのが分かる。
待て。
よく考えればおかしい。
何故、コイツは僕の前に現れたんだ？犯人だと分かっていて、かつ、3人も殺しているような奴を相手取るなんて、いくら姉さんを守るためとは言え、無謀すぎる。
そして。
そして何故。
何故僕はコイツを恐れているんだ！？
「く……来るな！」
咄嗟にナイフを前に突き出して距離をとる。
「ど、どうして僕を殺すんだ！」
「動揺したな？弱味をみせたら殺人は負けなんだぜ」
「僕が生きていないと殺人鬼は居なくなる！今みたいに治安は守られないぞ！？姉が守れなくなるんだぞ！？」
僕の発言に襲は
「まだ分からないのか。だからバカなんだよ」
と笑った。『バカ』という言葉が僕の胸に思い切り突き刺さる。
その所為か、急に冷静さを取り戻した。
そして走馬灯。
僕と襲、そして姉の3人での楽しかった日々が思い出された。
『警察は無差別殺傷事件の続きだと思ってるらしいけど、そうじゃないことは俺がよく知ってる』
先ほどの襲の言葉が急に思い出された。
ああ、そうか。
そういうことか。
「殺人鬼はお前じゃない。お前の前に居た本物だ」

その声で僕は現実に戻された。
襲はそう言って。
僕に逃げる隙も与えなかった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

僕は針葉の首からナイフを抜いた。未だ、鮮血が流れている。噴水のように、とまではいかないが。
「ハハハ……」
僕は静かに笑う。
ピリリリリ……と、何の設定もしていない携帯電話が悲しく鳴る。
ポケットの中から携帯電話を取り出す。
『如月　魅了』
と書かれていた。
『もしもし？大丈夫なの？』
「……終わった。ちゃんと」
僕はそう言って静かに通話を切った。
続いて、
テロリロリーンという雰囲気にそぐわない陽気な音でメールを受信した。
「……」
ニュース速報だった。
「へぇ……」
画面には「死宣告、８人目の殺人」という見出しだった。
死宣告。この地域ではない場所で最近、騒がれている殺人鬼だそうだ。
「会いたいもんだな。僕と同じ殺人鬼さんに」
僕はそのままポケットに携帯をしまい込んで、代わりに、入れておいた紙を抜き取る。
『如月襲殿　あなたの入学を心よりお待ちしております。　後世

学園』
紙にはそう書かれてあった。
「行こうか」
誰に言うでもなく、星だけの孤独な空を見上げて僕は呟いた。
照らす月もなく暗がりの中を静かに歩いた。

3話　月無き夜、星に願いを（後書き）

序章―Ａ　ｍｕｄｅｒｏｕｓ　ｆｉｅｎｄ―編は終了です。

次は序章―Ａ　ｈｉｅｒｄ　ｋｉｌｌｅｒ―編です。

1話　宣告

死宣告。
それが俺についた異名だった。
テレビのニュースで放映されている通りなのだが、説明をしておこう。

おもに警察が発表している情報から抜粋しつつ俺の言葉で説明しよう。

死宣告と呼ばれているのは当然理由がある。
俺は殺すと決めた相手に、『あなたを殺します』と宣戦布告するのだ。
宣告された相手は圧力に耐えられず逃げ惑う。
それを追い詰め、追い駆け殺す。そして最後に、殺した者の血液で『宣告通り』と死体の横に書いて完了だ。殺し方は『バラバラ殺人』だ。しかも腕や出欠の状態、断面などから、生きた状態でバラバラにされている。
当然こんな大きな事件を起こせば、誰かが何らかの目的で残虐な犯罪行為を行っている、と誰もが思うものだ。事実、そう思っている者が多い。
ということは一つの疑問が浮かんでくるはずだ。

『何故、死宣告は人を殺すのか』

つまるところ、目的――動機だ。
警察もそれを追っているようだが、いくら探しても動機が一つも出てこない――そうだ。
明らかに怪しい。何らかの理由づけくらいできるはずだ。どこか

しら共通点が見つかるはずだ。なのにそれすらも発表していない。
さらに言えば、被害者の名前と顔を明かすことをマスコミ各社に禁じているようだ。しかもかなり強い圧力で。
警察も困っているのだ。

つまり、わからないのだ。
警察は犯人が何を考えているのかもわからない。
まぁ俺の考えていることがわかるものなど、この世にいるはずもないのだが。

「さて」

前置きはこのくらいにしよう。
３月２２日１８：００現在。
俺は今、ある中学校の前にいた。
名前は……忘れたが、まぁ大丈夫だろう。下調べも何もしていないが。
別の地域には１７人も殺人を犯している殺人鬼がいるらしいが、この街にはそんな大罪を犯している者はいない。
俺を除いて、だ。

俺は堂々と入り口から入っていった。
警備員もいない学校だ。まぁどの学校にでもあるわけではないし、仕方がないといえばそれで終わりだった。
俺が殺人を犯す理由。
それは人が絶望したときの表情を見るのが楽しいからだ。
人は未来が見えていないこの世界でも何らかの形で希望を持っている。その希望をすべて無――それどころかマイナスにまで持っていくことが成功すれば、俺はそこに快感を感じるのだ。
閑話休題。

どの学年のどのクラスを狙うかも決めてこなかった。
で、ふと体育館を見てみた。
見たところ卒業式が近いようで、体育館にはそれらしい準備がされていた。
ふむ……。
卒業して高校に入学しようという今、希望に満ち溢れているに違いないな。
だから、3年生を狙うことにしよう。

「見学の方ですか？」
学校の先生だろう青年が後ろから声をかけてきた。
「ええ、息子の入学先にどうかなと思いまして」
「ご自由に見ていってください。この学校は見学自由ですから」
そう言って青年は俺の横を通って、前へと進んでいった。
笑顔だった。が、なんだろう……。
違和感を感じさせるような笑顔だった。
「あぁ……それで」
俺はつぶやく。
道理で無防備な学校だと思った。
うろちょろしていても何ら問題ないということか。
と、すれば。
「あの、すみません」
俺はできるだけフレンドリーに、怪しまれないように声をかけた。
「3年生のクラスはどこでしょうか？」

2話　怠慢

ハァ……ハァ……ハァ……。
日は落ちて、空はほとんど暗くなっている。
もうすでに、1時間近く走り続けている。
振り向く。
まだ影は俺を追い続けていた。
「何なんだよ……！！」
何故だ。
どうしてこうなった。
俺は。

俺はどこで間違えた！？

2階。
3年生の教室はその階にあるとその青年が言っていた。
「今日が卒業式でしたから……他の生徒はもう帰っていますが、3年生だけまだ残っています。担任の教師の話や生徒同士の別れの言葉とか……いろいろあるんですよ」
それだけ伝えて、1階にある『職員室』に入っていった。
終始、何か含むところがありそうな笑顔だった。
なるほど。卒業式が近いのではなく、今日が卒業式だからそのまま形が残っていたのか。
となると、3年生よりも2年生を狙う方が希望をつぶすのには良いのかもしれないけれど……どちらにせよ対象は3年生だ。だって3年しかいないんだもん。

俺は自分のジャケットの内側のポケットを確認する。
銃が1挺とナイフが1本。
ただの中学生の人生くらい簡単に終わらせることができる。
俺は2階に向かおうと、階段の方に足を向けた。
「ん……？」
階段の横にエレベーターがあった。
別にエレベーターを使おうと思った訳ではない。
エレベーターの前に車椅子に座った少女がいたからだ。
「こんにちわ」
少女は笑顔を浮かべて俺にあいさつした。
先ほどとは違って、自然な笑顔だった。
「……こんにちわ」
俺がそういうと、エレベーターに乗り込んで上に上がっていった。
「……」
あれもきっと3年生なのだろう。誰も車椅子を押してあげるような人間はいなかったことに多少違和感を感じたが、そういうこともあるのだろう。だからそれ以上気にも留めなかった。
エレベーターは2階で止まった。まぁ、残っているのは3年生か先生なのだから当然といえば当然だった。
「……」
あの少女も殺すことになるのだろう。
別に希望を持った人間しか殺さないわけではないのだけれど、未来に希望を持っていそうにない奴までも殺したいのかと問われれば俺はこう答えよう。

殺したい。
「さてと」
俺はつぶやいてから階段を昇っていった。
2階に上がると、その階は少しざわついていた。俺が高校生だった頃も同様な状況だった気がするし、気持ちはわかる。が、お前ら

はそれ以上のざわつき――『動揺』を得ることになるんだぜ。
目の前の教室の後ろの扉に手をかけた。
思い切り開ける。

開けた瞬間、ざわめきは一度静けさに変わる。先生も生徒も俺を見て、まずは疑問を持つはずだ。
「誰……？」
誰かがつぶやいたような気がする。
それを合図にするように、俺は銃を取り出した。
世界は常に変化している。この空間だって例外じゃない。
ざわめきが静けさに変わり、次の瞬間には
「きゃあああああああああああ！！」
それは戦慄に変化していた。
一人の女子生徒のその叫び声で皆がはっとしたように動き始めた。男子も女子もそれぞれ悲鳴や狼狽のような声を上げて逃げ惑っている。それでも落ち着いたように対応して、全員が俺から離れて行こうとする。
パン！
と。
銃声が響いた。もちろん俺の銃が火を噴いたのだ。黒板に弾丸が突き刺さっている。
「動くな」
俺は一言だけつぶやくように言った。それだけで空間はまたも静けさを取り戻し、動きも止まった。
支配感。
何と言うのだろう……恐らく天下統一した豊臣秀吉や徳川家康はこういう気分を味わっていたんだろうな、と感じた。
「さてと……」
誰から殺そうか。
見たところ男女に差異はない。頭のいい奴か人望の厚いやつを殺

そうと思ってきたのだが、はてさてどうしたものか……。
そう考えたのだが。
「逃げなくていいんですか？」
斜め下でそういう声がした。
「……！」
何かと思えば、先ほどの車椅子の少女がいたのだった。
入ってきた瞬間に、恐らく目の前にいたのだろう。しかし気づくことができなかった。
いや――そこじゃない。
「何がいいたい」
俺は質問した。
少女はまっすぐ俺を見つめる。
周りの生徒たちはその状況を見て、そわそわしたりびくびくしたりして、落ち着いていない。
それに対して、俺に発言してきた少女はこちらが驚くくらい落ち着いた対応だった。
「答えろ、何が言いたい」
「……」
少女は黙って自分の耳を2回ノックした。
耳を澄ませ、ということか。
その時小さく音が入ってくる。
……ウー……ウー……、と。

「け……警察……！？」
何で……。
いくらなんでも早すぎる。
いや――勘違いだ。これは別の場所へ向かっているだけで――
「あれは間違いなく、ここに向かっていますよ」
堂々と少女は怖がることもなく、俺に向かって言う。
「どういうことだ」

弱味を見せるわけには行かない。俺が殺人鬼である以上、弱いところを見せることは敗北を意味することになるのだ。
「私が連絡しましたから」
そう言って少女は特にそれを誇るでもなく、静かな目をして俺を見ていた。
その発言によって空気が少し緩んだのを感じた。
周りの生徒が少し安心しているということ――
「ふざけんな！！」
俺は銃を乱射する。
今度は叫び声が上がった。
「くっそが！」
ここで――こんなところで捕まるわけにはいかない！
俺は車椅子の少女の体を引っ張った。
少女の体躯は思ったよりも軽く、持ち上げることができた。
「く……」
少女は抵抗しようとするが、意味なく俺に引っ張られる。
「ルル！」
ご学友と見られる女生徒が、少女の名前を呼んだ。
残念ながらそれでも俺は少女を連れ去った。

「どうして警察に連絡できたんだ！」
俺は階段を走り降りながら尋ねた。
「不審者だったから連絡しただけですよ」
「は……！？」
「この学校に勝手に入ってきたじゃないですか」
「な……」
どういうことだ！？
この学校は見学自由じゃ……。
「今日は警備員の人も既に出払ってしまっていますが、この学校は許可なく入っていい学校ではないんですよ」

「そんな……」
驚きつつも俺はそのまま走り続ける。
そこであの青年の顔が思い浮かんだ。あの妙な笑顔……。
だましやがったのか！！
だがそんなことをこの女に行っても仕方がない。
「さらに言えば、私は人の殺気を感じることができるんですよ」
そう言って少女は。
先ほどとは違い、ニヤリと嫌な笑みを浮かべた。
瞬間だった。
寒気とともに彼女の足元に目が行った。
おかしいとは思ったのだ。
足が使えない女を引っ張ると、それはただのお荷物のようになるそうだ。だから人質として、足の不自由な奴は使い勝手が悪い。
それを思い出したがもう遅かった。
その少女が二本足で立っていたことに気付いたのも、遅かった。

3話　殺人

気づいてすぐに俺は少女の体躯を投げ捨てた。
寒気はすでに通り過ぎていて、恐怖に変わっていた。
「お前、何なんだよ！」
「じゃあ貴方はいったい何でしょうか？」
クス、と。
軽い笑い。空気が抜けるようなその笑いは、嘲笑や苦笑に近いもので、しかしそれ以上に恐怖を感じさせた。
もう後は考えるまでもなかった。
俺はそいつに背を向けて走り出した。

1時間以上走ったのだ。

それでも影はゆらりゆらり、のらりくらりと、迫ってきていた。
俺の全力疾走にまるで、歩くようなペースで影は追ってくるのだ。
「畜生！畜生！！畜生！！！」
くっそが。
どうなっている。
これは一体どういうことなんだ！！
「いつまでも鬼ごっこを続けんですか？それともかくれんぼにでもしましょうか？」
女はそう言って俺を追い駆け続ける。
よくよくみると、一歩一歩で驚くくらい進んでいるようだ。
『縮地』。
それが突然頭によぎった。
いや、そんなわけがない。あんなの現実にできる奴なんているはずがない。
俺は走り続けた。

どんな道筋を何分走り続けていたのかも覚えていない。
外はかなり暗くなっており、月明かりも見られなかった。
そこがどこなのかもしっかり理解はできていなかった。工場の跡地ということだけは分かった。
「やはり、かくれんぼの方が正解だったか……」
あの速さを相手取るには、俺の体力にも限界があった。だからうまく路地裏やら曲がり角やらを利用して上手く撒いた――

「かくれんぼでも私には勝てませんよ」

――つもりだった。
「……！？」
「残念でしたね。私からは逃げられません」
私は鬼ですから。
そう言って少女は笑った。
「ところで」
少女は更に続ける。
「貴方はいったい何者なのかしら？」
「俺は……」
俺は。

俺は銃を取り出した。

「俺は死宣告だ！」
そして弾丸を放つ。
ほぼ距離は1メートル未満。
ならば、負けるはずがない。
そう踏んでの行動だったのだが――

「！？」
少女は無造作に腕を振っていた。
いや、俺からすればそれは無造作だったのだが、彼女の眼は明らかに何かに狙いを澄ましていた。
そしてその狙いが的中したのだろう。

空中で弾丸が真っ二つに切られ、さらに４等分されて落下した。
「は……！？」
彼女が切った。
そうとしか考えられないが、そうとは考えにくい。
「な、なにをしたんだ！？」
「今……死宣告って言いましたか？」
少女は少し怪訝そうに俺を見つめた。
「ああ。この辺一帯の殺人鬼はこの俺――」
「どうして殺しているの？」
少女はそう言って俺をにらむ。
「は……！？」
「貴方はどうして、殺人を犯し続けるんですか？」
「……」
動機。
警察官も知らない、俺の殺人の動機。
その意味をこいつは興味本位で知りたいということか。
なら、教えてやろう。

「快楽だ」
「……」
「俺は希望を持っている人間を殺すことに喜びを感じている。俺にとって殺人を犯す理由はそれだけで充ぶ――」
ぼとり。
「ん――」

何かが落ちた音に気付いて、俺は左側に視線を向けた。
長い棒のようなものがあり、途中が屈折している。そしてその上部には５つの突起が見えた。
え。
いや、この形は。
腕だ。
「う、うあああああああ！！」
俺は自分の左腕がなくなっていることに気付いた。それからすさまじい痛みが体を襲った。
「適当なことを言わないでください」
強い嫌悪の視線を俺に向けていた。
「よく考えればわかるでしょう？警察が動機を見つけれてないわけがないじゃないですか」
「あああああああああああああ！？」
痛みに叫び続けている。
それでも、こいつの発言に耳を傾けていた。
どういうことだ？つまり、警察は動機を見つけていたということか？
「どうして死宣告をされた人は宣告された時点で――脅迫された時点で警察に連絡しなかったのでしょうか？」
「あああああ！！」
「逆転の発想です。つまり、なぜ脅迫された時点で連絡しなかったのかを考えるのではなく、連絡できない人間とはどんな奴なのか、ということですよ」
少女は俺を見下ろして、淡々と続ける。
俺は脳をかき回して、思考を何度も何度も繰り返す。
つまり、警察と関わることを拒否するような人間――警察に調べ

られては困る人間――。
「ま、さ、か……」
俺は小さな声でつぶやいた。
「そう。宣告された人間――殺された人間は全員犯罪者なんですよ」
そうか。
そういうことだったのか。
犯罪者は警察に連絡することはできない。だから、警察はいつも死宣告に後れを取っていたのか。
「警察側も、『何者かが犯罪者を殺している』なんていう噂を流すわけにはいかないから、被害者の名前すらも出すわけにはいかなかったんですよ」
どっかの新世界の神がやろうとしたようなことが起きるのは現実世界では避けたいことでしょうから。
そう言って少女は自分の言ったことを嘲るように笑った。
「お前……何なんだよ」
俺は（本当の意味で）決死の覚悟で、少女に問いかける。
「まだわかりませんか？」
「……いや」
正直なところ気づいていた。
死宣告というものへの異常な依存。というよりは、まるで自分のことのようにすべてを理解している。
つまり――
「本物の……死宣告か」
俺は少女を見た。
「ええ」
少女はもう一度にやりと笑った。
その笑みにあった恐怖は、最終的には、畏怖にまで変わっていた。
だが、不思議と今度はそこまで逃げようとは思わなかった。
なぜなら
「俺はアンタの生き方に憧れた」

俺は最後の力を振り絞って宣言する。
そう。
ここまでくればお分かりだろう。
俺は所詮、模倣犯だ。
ただの偽物だ。

「アンタの宣誓して殺人を行うという、その真っ直ぐな姿勢……だからこそ俺は模倣犯になった」
俺はその少女に向かって宣言する。
少女は一度目を閉じて、それから口を開いた。
「そうですか。私は犯罪者を殺すだけです。ですが——」
そう言って少女は手を開いた。
「お礼と言ってはなんですが、ちゃんと殺します。生きたまま、バラバラにします」
よく見ると、彼女の手には銀色のワイヤーのようなものがぶら下がっていた。
あれか。
あれで弾丸を切り裂いたんだ。
いや、今わかってもしょうがないし、分かったところでどうにかなる問題でもない。
それにあのワイヤーもただのワイヤーではないのだろう。
「こうやって私はバラバラにするんですよ」
そう言って彼女が振り乱すその長い黒髪と銀のワイヤーが俺の最後の景色だった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

死体の横に、宣告通りと書いてから私は立ち上がった。
「貴方もこんなことさえ――犯罪行為さえ行わなければ、我々の組織に殺されることはなかったんですよ」
我々の組織。
簡単に言えば、犯罪者撲滅組織だ。
私は諸事情によりそこに所属することとなり、諸事情により犯罪者を殺している。
詳しい話は私はしたくないので、省略する。
まぁ誰が聞いている訳でもないのだけれど。
「それにしても」
ここで私は死んだことにした方が本当は都合がよかったのだけれど……。
「どう伝えたものかしら」
私がそう呟くと
「！」
カラスが工場跡地に入り込んできた。
「何かしら？」
私はそのカラスに話しかけた。

『本部の方に届いた通知だ。マリア様が謹んでお受けしろと言っている』
とカラスは言って、口に咥えていた封筒を落とした。
私はそれを拾い上げた。
『では私はこれで。こいつは、破壊しておいてくれ』
カラスはそう言って、さらに口の中から通信機を吐き出してから飛び去って行った。
私はまず、その通信機を踏みつぶす。
それから封筒を開いた。
「！」
ウー……ウー……

と、サイレンが聞こえた。
ポケットに無理やり封筒を突っ込んで、走り出した。
するとすぐに、街をビルからビルに飛び回る影を見つけた。
「……まさか、『現代のねずみ小僧』の仕業かしら？」
あんな動きが出来る者はほとんどいない。ともすれば。
「殺しましょうか。私の手で」
つぶやいてから私もビルの上へと跳躍する。
そして、その影を追い駆けていく。

「は、はぁ！？」
影はそう言って叫ぶ。
「お前、縮地じゃねーかそれ！！」
「！？」
初めてだ。こんなに早く私の移動に気付いたのは。
これは……只者じゃない。
「くっそが！！」
そう叫んで影は消えた。

――消えた！？

私は瞬間的に殺気を探そうとする――が、相手は殺人犯ではない。
殺気では見つけられない。
「逃がした……」
まぁ仕方がないといえば、仕方がない。
が、まぁまぁショックではあった。
「……」
私は静かに、ポケットの紙に手を伸ばした。
『十六夜（いざよい）　縷々（るる）　殿　あなたの入学を心よりお待ちしております。
後世学園』

……後世学園。

「どういうことか……マリア様に聞いてみなければならないわね」

私は呟いて空を見た。

月はなかった。

3話　殺人（後書き）

序章―Ａ　ｈｉｅｒｄ　ｋｉｌｌｅｒ―
はこれで終了です。
バトル要素も取り入れれる可能性を残しておきました。

次は
序章―Ａ　ｐｈａｎｔｏｍ　ｔｈｅｉｆ―
です。

1話　Dreaming（前書き）

序章―A phantom theif―

1話　Dreaming

3月22日だった。
「まーや！」
そう言って俺は彼を呼ぶ。彼は眠そうに顔を上げた。
「……何？」
「卒業式の準備。やるぜ！」
俺がそういうと、
「俺がやんなくたっていーじゃんよー」
彼はそう言って、眠そうに顔を上げた。
「お前が居てくれたら、10人楽できるんだよ！ほら、来いよ！」
「それお前が楽したいだけじゃ――」
「何のことだか」
俺はにやりと笑った。

彼は四阿（あずまや）　朔馬（さくま）――通称『まーや』
彼は異常な少年だった。

体育館に数人で固まっていた集団に混ざる
「よう！遅かったな！」
「ああ、まーやが渋ってた」
「俺寝てたんだけど……」
まーやはそう言って、軽く笑う。
それでもまーやはやる気を出したのか、
「っしゃ！任せろ」
と言って笑った。
そして、女子が持っていた装飾品を手に取って、飛び上がる。
彼の異常な点。それは、運動神経。

バスケットゴールのリングの上に立ち、さらにそこを踏み台に2階に上がる。
「ここから向こうにつなげばいいんだな？」
と、まーやは言って今度は壁をける。
そのまま次の足を壁に、さらにその次の足を。
と。
彼は壁を走り出した。
常人ではできない行動。常人ではもちえない筋肉。
彼は備えられるべき力が限界値まで底上げされているのだ。

向こう岸に到着して、飾り付けを済ませる。
「他にやれることあるか？」
「いや、これだけだったんだよ。ありがとう、まーや」
「……これって本当に俺がする必要あったのか？」
「楽できて助かったよ」
「まあいっか」
まーやは淡泊にそう言って、二階から飛び降りた。

「まーや。カラオケ行くか？」
「ゆく！」
まーやは歌が上手い。
そして上手いうえに、特技がある。
まーやと俺と、もう一人友達と一緒にカラオケ店に向かった。
「♪？？？？」
彼には声色がいくつもあるのだ。
女性アーティストの曲も男性アーティストの曲も、機械音までもできる。そしてデスメタルまで完備。
のどの筋肉がどーのこーのと彼は言っていた。

「昔から、声真似みたいなのが好きだったからなー」
まーやは笑う。
「まーやは何でもできるよなー、スポーツでもなんでも」
と、友人の一人が言った。
「おうよ。何でもしたいんだよ。俺は、な」
「でーも、人見知りだよなー」
俺はそう言った。
「う……」
「ていうか、恥ずかしがり屋だろ？女子とも話せないじゃん」
友達も同意する。
「覚えてるか？一年の時の自己紹介！」
「あー、覚えてるよ！四阿　さきゅまだろ？」
「そうそう！皆の前で上がっちゃって、噛みやがってさ！」
「ああ、そう言えば今年の国体で、助っ人でバスケ部の助っ人してさ！」
「あー、あのダンクシュート決めたり、最後にブザービートでエンドラインからゴールまで投げ飛ばしたり！」
「で優勝したのに、最後にみんなに胴上げされそうになって全力疾走で逃げたりさー」
「あー、もううっせ！」
まーやは叫んだ。
「何なんだよ！もう帰るぜ！」
「やめろよ。マイクを通して叫ばないでくれよ……」
俺はそう言って、耳を抑える。
「でも、お前って部活動しなかったな。何でなんだ？」
「いや、目立つのは好きじゃないんだよなー」
「でもスポーツ推薦とかもできたかもしれないぜ？」
「いいんだよ。俺は、スポーツなんか二の次で」
と、まーやは笑った。
「へー、じゃあ何かあるのか？やりたいことでも」

「あるよ」
まーやは呟いた。
「俺、夢あるんだよ」
俺には聞き取れなかった。

2話　Dark side story

3月22日の夜。
俺は裏路地に居た。

「今回は会社内にある、1枚の絵画。それを手に入れることさえできればいい」
ホームレスの爺さんこと、『やっさん』は、座ったままノートパソコンをいじりつつ俺に吐き捨てた。
「……いつも思うけどそのスタイルは似合わないよな」
「そうか？偏見は捨てたほうがいいな」
見た目はただのご老体のホームレス。
しかしそれは周りからのカモフラージュ。実は裏オークションへの仕入れ人だ。
裏オークション。
それは基本的に『盗品』の美術品を扱うオークションだ。
どうしてもその美術品が欲しい者や、あるいはただのオークションと同じノリで参加する者などさまざまである。
それの仕入れ人である、ということはすなわち彼は『盗品を扱う男』だ。
そう。
泥棒である。

「ある会社っていうのは？」
「王城グループの提携会社だ」
「王城グループ？っていうと、都会のあれか？」
「あれだ。それの提携会社だよ」
「となると、ほかに価値のあるものもありそうだな？」

俺はニヤリと笑って、やっさんを見た。
「ああ。お前の欲しがっていた宝石もある」
「『カオスビリオン』か！？それとも『ティアーナイト』……！？」
「残念だがその2つとも違う。『バイオレッド』だ」
「バイオレッド……」
バイオレッド。
それは日本で作られた『菫色（すみれいろ）』の宝石。
宝石そのものはそこらのダイヤと遜色（そんしょく）ないが、その装飾の造形美が一目置かれている作品だ。その素晴らしさから、『バイオレッド』という色そのものを名乗ることのできる数少ないこの世界の宝石の一つとなっている。
「……マジかよ」
「思ったよりも上で驚いたか」
「ああ。俺の夢だ」
「言うと思ったぜ、坊主」
「坊主じゃない。俺も立派な怪盗だ」
「まだ認めてはいないぞ、師匠としては」
「いい加減認めさせてやるぜ」
俺はそう言ってやっさんを睨む。
やっさんはそんなこと諸共しない様子でパソコンをいじると、
「メールで地図を送っておいた。指示もメールでしてある。ちゃんと記憶して任務を遂行しろ」
「了解だ。任せとけ」
「あと、服はこれな」
そう言ってやっさんは1つの紙袋を渡す。
「スーツ……」
「ああ。あと、スーツケースには道具一式入れてある。使い方は説明するまでもないよな。あと、王城グループの人間として入れるように連絡はすでに済ませてあるから安心しろ」
「準備がいいな」

「俺の代わりにやってもらってるんだからな。それくらいは当然だ」
そう言ってやっさんはさっさと行け、と言わんばかりに手を振った。
俺は苦笑しながら路地を出た。

最寄りの駅のトイレで着替えを済ませた。
「……ふむ」
鏡で自分の姿を確認する。
サラリーマンの様なきっちりしたスーツに、いつもはつけない伊達眼鏡。
その容姿や身長や体格からも大人であるようにも見えるが、少し若すぎやしないか？
そんなことを思いながら、あまり長々と鏡の前に立っているわけにもいかないので、駅のトイレから出た。

会社名は『未来財閥』。ビルはこの地方では大きい方で、２０階建のビルだ。
割と新しい企業で、専門としているのは警備関係らしい。骨が折れそうだが、その分戦いがいのある会社だ。相手に不足はない。
「行くか」
スーツケースを片手に俺はロビーに入った。
受付の前に行き、
「すみません」
と声をかける。できるだけ格好よく、クールに。
「はい」
「王城グループの四阿です」
「あ、はい。今社長の方に連絡します」
受付の女性はそう言って電話に手を伸ばした。

しばらくして一人の男がやってきた。
「社長の菊川と申します」
と、名刺を見せてきた。
緊急事態。
こちらも名刺を出さなくてはならないが、果たしてどこにあるのか。
取り敢えず、内ポケット。
あった。
緊急事態その2。
マナーを知らない。
仕方がない。
まず俺は菊川社長の名刺を受け取る。次に、俺は名刺を取り出すふりをして、一枚を床に落とした。
「ああ、申し訳ありません」
少し焦る様子を見せる。
「いえ、構いませんよ」
予想通り、菊川社長は自らの手でその名刺を拾い上げて受け取った。

作戦通り。

エレベーターに乗り込み、最上階にある社長室に向かう。
「……」
俺は携帯電話で仕事内容と手順を再確認。
あと、5分……。
エレベーターが最上階で止まり、応接室に案内される。
その応接室の奥には社長室がある。
そして俺の目的の美術品は目の前にある。
応接室にかかっている、金色の装飾された額縁に飾られた一枚の

絵画。
「見事な絵ですね」
「おお、わかりますか！？」
「ええ、本当に」
繊細かつ大胆に描かれた絵だ。見事な色彩で描かれているその西洋の街並みは素晴らしいの一言に尽きる。
これは欲しがるのも分かる美術作品だ……。が、少し違和感。
素晴らしいの一言を言わせる作品を作ったような……そんな感じ。
それは、そう。
心が込もった絵を、心を込めて、心が込もらないように描いたような絵。
うん、自分で言ってて意味が分からない。
そして俺の欲しがる『バイオレット』はどこだ？
Ｐｕｌｌ……Ｐｕｌｌ……。
と、奥の社長室で電話の鳴る音がした。

「おっと、失礼」
菊川社長はそう言って奥の部屋へと消えていった。

「作戦決行だな……」
この部屋にあるバイオレットも探し出さなくては。

タイムリミットは約５分だな。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0210x/

Stragglers Party

2011年12月10日01時01分発行